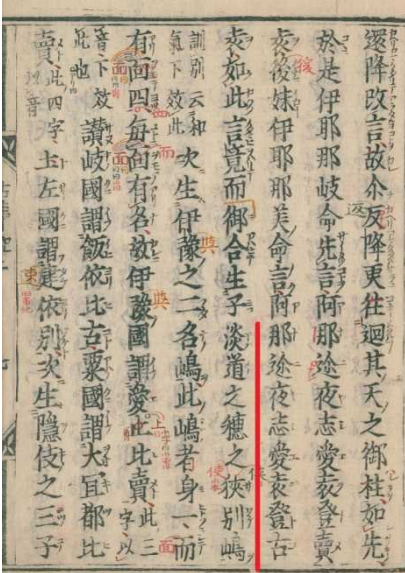





① 申請者	◎淡路市、洲本市、南あわじ市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」 ～古代国家を支えた海人の営み～			
④ ストーリーの概要（２００字程度）			
<p>わが国最古の歴史書『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」。この壮大な天地創造の神話の中で最初に誕生する“特別な島”が淡路島である。その背景には、新たな時代の幕開けを告げる金属器文化をもたらし、後に塩づくりや巧みな航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた“海人”と呼ばれる海の民の存在があった。畿内の前面に浮かぶ瀬戸内最大の島は、古代国家形成期の中枢を支えた“海人”の歴史を今に伝える島である。</p>			
			
『淡路之穂之狭別之嶋』として、日本列島の中で最初に生まれた島が淡路島であることを記した『古事記』	イザナギ・イザナミの国生みのイメージ	海人の塩づくりのイメージ	鳴門の渦潮
<p>イザナギ・イザナミの二柱の神様が天の沼矛で下界をかき回し、塩の雫が固まって「おのころ島」ができる描写は、海人が生業とした塩づくりの過程で製塩土器の中の海水を攪拌し、結晶塩ができる様子を重ね合わせられる。また、天の沼矛でかき回すことによって下界が渦巻く描写は、海人が活躍した鳴門海峡の巨大な渦潮と重なる。</p>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	淡路市教育委員会 社会教育課長 伊藤宏幸		
電 話	0799-64-0001 (代表)	FAX	0799-64-2500
E-mail	hiroyuki_ito@city.awaji.lg.jp		
住 所	〒656-2292 兵庫県淡路市生穂新島 8 番地		

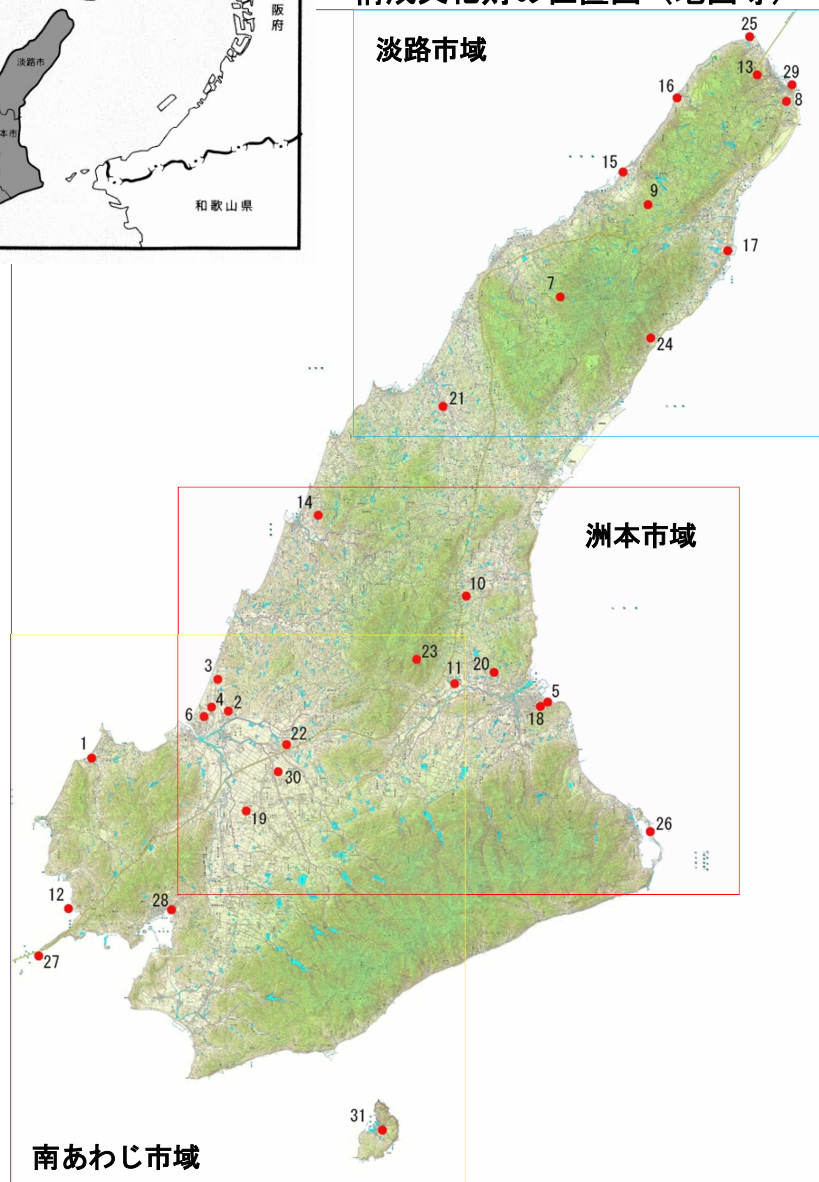




市町村の位置図（地図等）

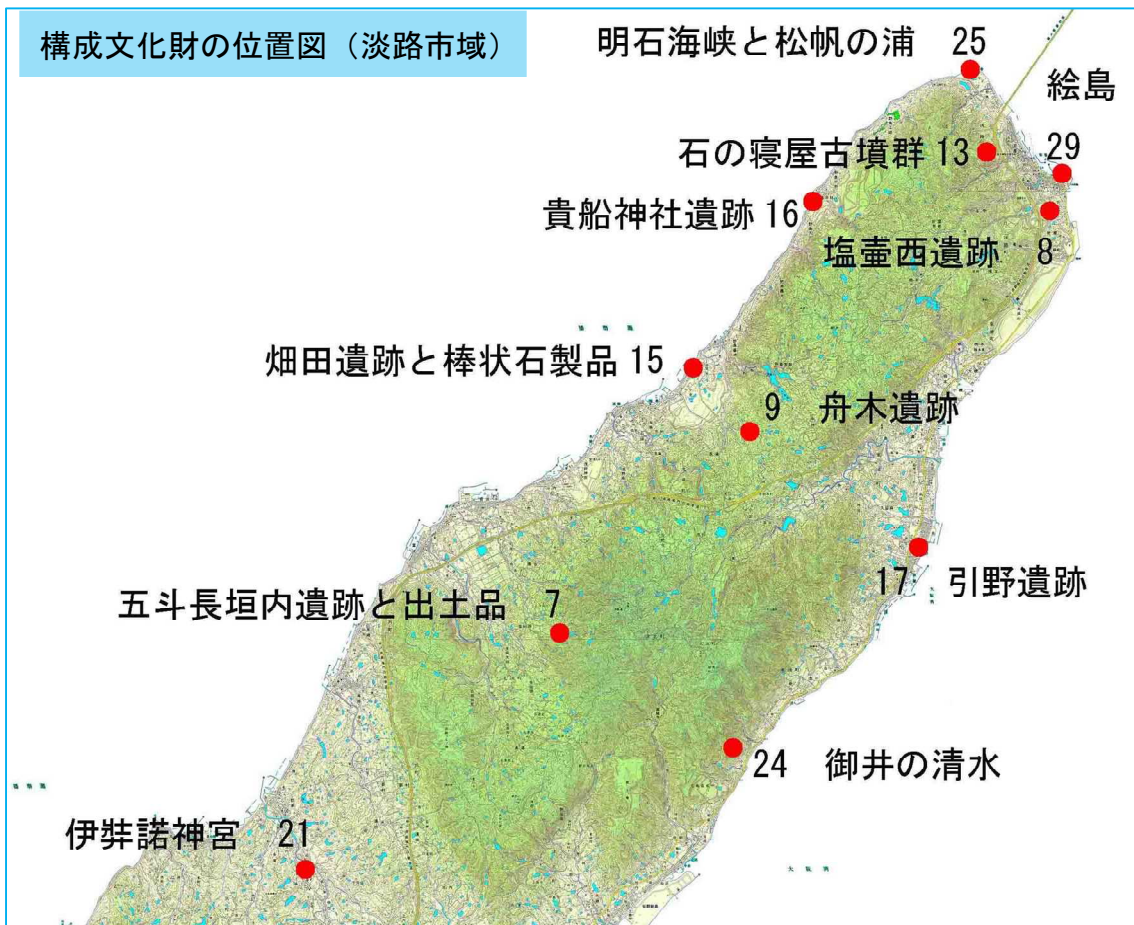


構成文化財の位置図（地図等）

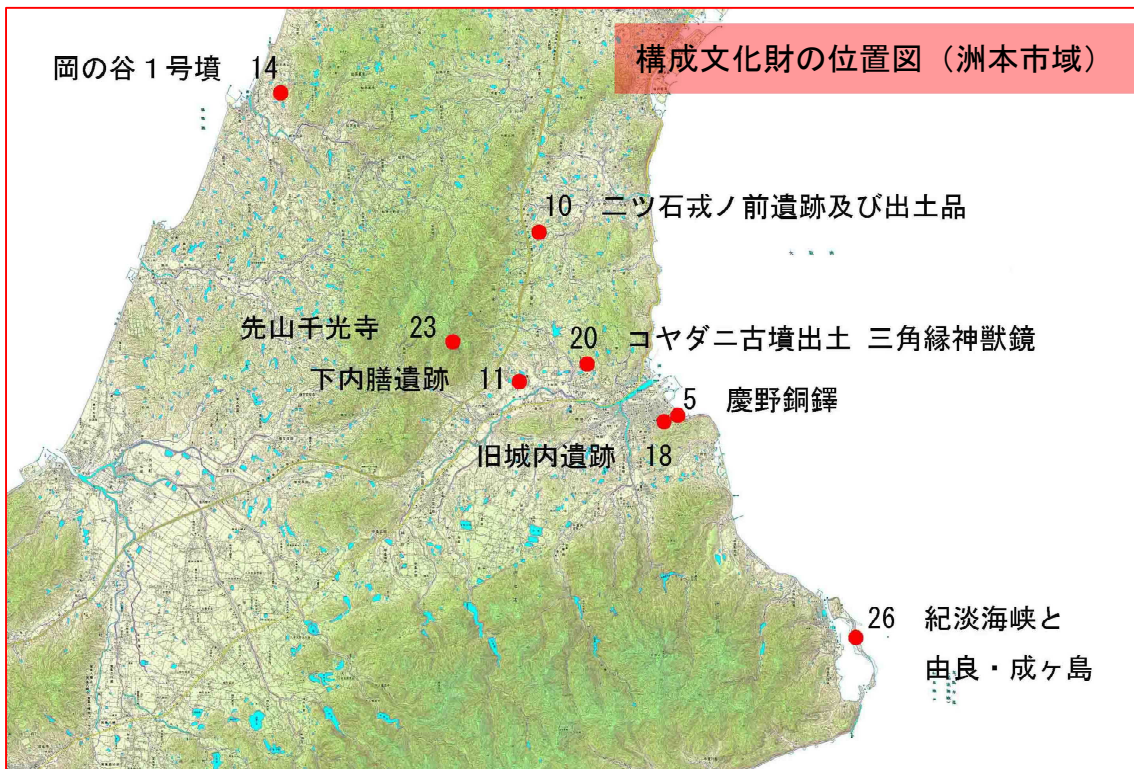




構成文化財の位置図（淡路市域）



構成文化財の位置図（洲本市域）







## ストーリー

現存するわが国最古の歴史書『古事記』に描かれた「神話の世界」。そこには「国生み」「天岩戸」「八<sup>あまのいわと</sup>俣<sup>や</sup>遠呂智」「大國主命」など、日本人ならだれもが一度は耳にした神話が並ぶ。それは、古代日本人の宇宙観や世界観を背景に、天地が形づくられ国家が誕生する過程を、幾多の神々の姿になぞらえ描いた壮大な天地創造の物語である。その冒頭を飾るのが「国生み神話」。イザナギ・イザナミの二柱の神様が、生まれたばかりの混沌とした大地を天沼矛で塩コオロコオロとかきまわし、矛先から滴り落ちた塩の雫が凝固固まった「おのころ島」で夫婦となって日本列島の島々を生んでいく。その中で、最初に生まれた“特別な島”が淡路島である。

その背景には、大陸や朝鮮半島と畿内を結ぶ大動脈“瀬戸内の海”の東端で、畿内の前面に横たわる瀬戸内“最大の島”として、古代国家形成期に重要な役割を果たした“海の民”の歴史があった。それは、古代国家成立の原点ともいえる紀元前の弥生時代に始まる。

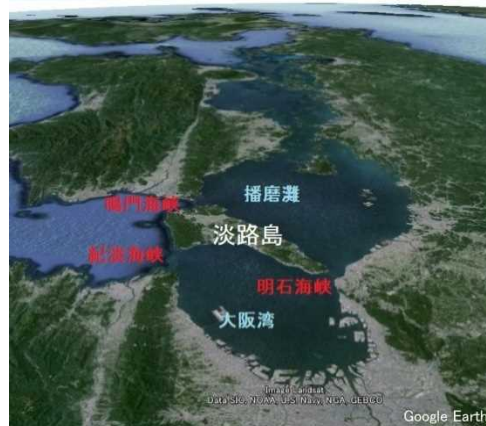
### ■ 金属器時代の始まり ～ 先端文化をもたらした“海の民”～

稲作の本格化とともに社会構造の大変革が始まる弥生時代は、金属器時代の幕開けでもある。淡路島では、紀元前に製作された古式の青銅器である 21 個の銅鐸と 14 本の銅剣が発見されている。日本最古段階の中川原銅鐸をはじめ、これまでに例の無い7個全てに舌を伴う松帆銅鐸、14本がまとまって出土した古津路銅剣など、その多くが海岸部で発見されている。播磨灘を臨む海岸地帯を神聖な場所として埋納するあり方は、新たな時代の祀りに海の民が携わったことを想像させる。

この島の姿は、紀元前後を境に劇的な変化を迎える。青銅器文化が栄えた平野の集落に取って代わるかのように出現する山間地の集落。ここでは、弥生社会に大きな変革をもたらした鉄器文化が畿内中心部に先駆けて受容されていた。1世紀に鉄器生産を開始した五斗長垣内遺跡では、その後100年以上継続した鍛冶のムラや朝鮮半島からもたらされた鉄斧が、海の民によって伝えられた先端技術の定着を物語る。また、二ツ石<sup>ふたつし</sup>戎<sup>えびすのまえ</sup>ノ前遺跡では、鳴門海峡を渡って運ばれた四国徳島産の辰砂<sup>しんしゃ</sup>を原料とする朱の精製を行った工房も発見されている。これらの最盛期はいずれも邪馬台国の女王「卑弥呼」が登場する直前の時代である。島北部の山間地集落で生産された鉄や朱は、後に大王が求めた重要な物資となるものであり、「倭国大乱」の謎を解く鍵となる可能性を秘めている。

### ■ 大王の時代 ～ 塩と航海術で王権を支えた淡路島の“海人”～

前方後円墳に葬られた大王が出現する時代の淡路島。そこには『日本書紀』に登場する“海人”と呼ばれた海の民の活躍があった。応神天皇の妃を吉備に送る船の漕ぎ手として集められた「御原の海人」や仁徳天皇即位前に朝鮮半島に派遣された「淡路の海人」など、優れた航海術をもって王権を支えた海人



畿内の上空から見た淡路島の位置



7個全てに舌を伴う松帆銅鐸



朱を生産した二ツ石戎ノ前遺跡の石杵



五斗長垣内遺跡の弥生鍛冶体験



の姿が描かれる。また、履中天皇即位前に安曇連浜子<sup>あずみのむらじはまこ</sup>に率いられて軍事行動を起こした「野嶋の海人<sup>あま</sup>」。彼らの姿には、安曇氏<sup>あずみ</sup>に率いられた水軍としての性格も読み取れる。これらは、『日本書紀』の中に数多く登場し、王権と深い関わりを持つ淡路島の姿や、今も島に残る「御原<sup>みはら</sup>」や「野島<sup>のじま</sup>」の地名から、淡路島を拠点とした海人<sup>あま</sup>と考えられている。

海人<sup>あま</sup>の活動の跡は、島内各地の遺跡にみることができる。紀元前後に出現した山間地集落が急速に姿を消すと同時に海岸部で始まる塩づくり。島の土器製塩は3世紀に本格化する。その後、5世紀に熱効率の良い丸底式の製塩土器を生み出した引野遺跡<sup>ひきの</sup>、6世紀には炉底に石を敷き詰めて熱効率の向上を図った石敷炉を導入した貴船神社遺跡<sup>きふねじんじや</sup>など、島内各地の製塩遺跡で作業時間を短縮し、大量生産を目指した塩づくりの進化の跡をみることができる。製塩技術の革新によって大量生産された塩は、島内での消費にとどまらず、畿内の王権にも供給されたと考えられる。

大量の鏡や鉄器を副葬し、巨大な石室を築く古墳が造営された時代。島にも三角縁神獣鏡を受領したコヤダニ古墳が存在する。その中で、鳴門海峡を望む小島全体を墓域として小規模な石室を多数築き、漁具を中心に副葬した沖ノ島古墳群は、激しい潮流の海峡を生業の場とした海人<sup>あま</sup>が眠る古墳である。

塩の生産術に長け、巧みな航海術を持った淡路島の海人<sup>あま</sup>は、列島を統治する王権にとって必要不可欠な存在となっていた。

## ■ 都を支えた「御食国」<sup>みけつくに</sup> ～ 万葉集に詠まれた律令時代の“海人<sup>あま</sup>” ～

「・・・淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海をとめ・・・」と『万葉集』に詠まれた歌からは、奈良時代に受け継がれた海人<sup>あま</sup>の塩づくりを知ることができる。朝廷の儀式である月次祭<sup>つきなみ</sup>の神今食<sup>じんこんじき</sup>の塩が「淡路の塩」と定められていたとする『延喜式』<sup>えんぎしき</sup>の記録は、淡路の塩が特別に用いられたことを伝える。塩の他にも、淡路島の海人<sup>あま</sup>が生産する多くの海の幸が都に運ばれ、天皇の食膳を司る「御食国<sup>みけつくに</sup>」として、山部赤人に詠われた島の姿を生み出した。ここにも淡路島の海人<sup>あま</sup>と朝廷との関係の深さが窺える。

奈良時代に編纂された『古事記』は、稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>が暗誦<sup>あんしやう</sup>した『帝紀』『旧辞』をもとに、それまでの歴史を振り返り、太安万侶<sup>おおのやすまろ</sup>が書き記したものである。古代国家形成期に果たした役割の重要性によって淡路島は、『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」の中で、最初に生まれる“特別な島”として描くことが必要となったのである。

## ■ 今に息づく「国生みの島」 ～ 今日にみる“海人<sup>あま</sup>”の足跡 ～

『古事記』編纂に際して評価された海の民の歴史は、その後二千年を超える島の暮らしの中で幾度となく振り返られ、その都度、島人のよりどころとなって新たな文化を創造してきた。海人<sup>あま</sup>と呼ばれることとなる海の民の足跡は、貴重な遺跡や多様な文化遺産として良好な姿で今も島に残り、多くの万葉歌人に詠まれた美しい風景は景勝地としての今の島に受け継がれ、「御食国<sup>みけつくに</sup>」としての歴史を刻んだ島は今も豊かな食材に恵まれた島でありつづけている。淡路島は、古代国家形成期の中枢を支えた“海人<sup>あま</sup>”の歴史を今に伝える島である。



島全体を墓域とする沖ノ島古墳群



整備された貴船神社遺跡



コヤダニ古墳の三角縁神獣鏡



「御食国」を今に伝える島の食材





ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	ながかわらどうたく 中川原銅鐸	国重文	金属器時代の始まりを告げるわが国内最古段階の菱環鈕(りょうかんちゅう)式銅鐸の一つ。古式の銅鐸ばかりが発見されている淡路島の銅鐸を象徴する。	南あわじ市
2	にっこうじどうたく 日光寺銅鐸	国重文	淡路島の銅鐸の特徴である舌を伴う希少な銅鐸。播磨灘を臨む慶野(けいの)村から出土した銅鐸の一つで、弥生時代の新たな祀りに海の民が携わったことを想像させる。	南あわじ市
3	どうたくしゅつどち なか みどう 銅鐸出土地 中の御堂	県史跡	日光寺銅鐸の出土地。日光寺に伝わる古文書「宝鐸御届写」には、「貞享3年(1686)の出水により、播磨灘を臨む海岸部で8個の銅鐸が出土した」と記されている。銅鐸祭祀に海の民が携わったことを想像させる遺跡。	南あわじ市
4	まつ ほ どうたく 松帆銅鐸	未指定	平成27年(2015)4月、松帆地区から採取された土砂中より、7点発見された銅鐸。最古段階の菱環鈕(りょうかんちゅう)式1点のほか、6点全てが紀元前に製作された古式の銅鐸。2組4点が入れ子状態で発見されたほか、全てに舌(ぜつ)を伴うなど、他に例をみない埋納例である。播磨灘を臨む海岸地帯での埋納が予想されることから、弥生時代の新たな祀りに海の民が携わったことを想定させる銅鐸。	南あわじ市
5	けいのどうたく 慶野銅鐸	国重文	播磨灘を臨む海岸地帯で出土した外縁付鈕(がいえんつきちゅう)式銅鐸の一つ。弥生時代の銅鐸祭祀に海の民が携わったことを想定させる銅鐸。	洲本市
6	こつ ろ どうけん 古津路銅剣	県有形	多数の銅鐸が発見されている播磨灘を臨む慶野松原近くの古津路遺跡から発見された14本の銅剣。多くの銅鐸とともに海岸部近くに埋納された青銅器。弥生時代の青銅器祭祀に海の民が携わったことを想像させる銅剣。	国立歴史民俗博物館 兵庫県立考古博物館 (南あわじ市)
7	ごっさかいといせき 五斗長垣内遺跡と  出土品	国史跡	弥生時代後期に急増する山間地集落の一つ。金属器時代の幕開けを告げる弥生時代にあって、古代国家成立に重要な役割を果たした鉄器文化を、畿内中枢部に先駆けて受容したことを知る遺跡。大規模な工房建物や多数の鉄器が出土。紀元1世紀から始まる鉄器生産が100年以上も継続した。工房建物から発見された朝鮮半島製の板状鉄斧などから、瀬戸内の海を介して海の民が伝えた鉄器文化の定着を見ることができる。	淡路市

7		県有形	上記の鉄器生産を実証する出土遺物。生産された鉄器や鉄素材のほか石製工具類などは、瀬戸内の海を介して海の民が関わった先端技術と重要物資の生産や流通の様子を示す。	淡路市
8	しおつぼにしいせき 塩壺西遺跡	未指定	弥生時代後期に明石海峡を見下ろす山の上に営まれた集落跡。大型の鉄鏃を持ち、狼煙（のろし）をあげた跡が発見されている。瀬戸内から畿内に向う海上航路の要衝である明石海峡を見張ったと考えられる遺跡。	淡路市 兵庫県立考古博物館
9	ふなきいせき 舟木遺跡	未指定	畿内に先駆けて鉄器文化を受容した島北部の弥生時代山間地集落の一つ。40haにも及ぶ広大な面積や大型建物跡の発見から、その中心的役割が想定される。出土している製塩土器やイイダコ壺などから、山間地集落と海の民との関係を知ることができる。	淡路市
10	ふたついいびすのまえ 二ツ石 戎ノ前遺跡 及び出土品	未指定	弥生時代後期に急増する山間地集落の一つ。四国徳島県産の辰砂(しんしゃ)を原材料とした朱の精製を行った工房跡と使用した工具類が発見されている。鳴門海峡を渡って原材料を運び、時代の鍵となる重要物資の生産と流通に携わった海の民の活動を見ることができる。	洲本市 兵庫県立考古博物館
11	しもないぜんいせき 下内膳遺跡	未指定	淡路島中央部に位置する弥生時代の拠点集落。河内や紀伊の土器が出土。大阪湾を介して交流する海の民の存在が窺える。	洲本市 兵庫県立考古博物館
12	おきのしまこふんぐん 沖ノ島古墳群と  ぼうじょうせきせいひん 棒状石製品	未指定	鳴門海峡を臨む小島全体を墓域とする古墳群。自然石を積み上げた小規模な石室を多数築き、漁具を中心とした副葬品を納めることから、海人(あま)の長が葬られたと考えられる。『日本書紀』に登場する「御原(みはら)の海人」の活躍を想像させる。 棒状石製品は沖の島古墳群の特徴ある副葬品。細い石棒を磨き上げ、両端をとがらせた特徴的な形態を示す。沼島以外の淡路島内では産出しない緑泥片岩(りよくでいへんがん)を素材とすることから海を生業の場とした海人(あま)との関係が想定される。	南あわじ市
13	いし ね や こふんぐん 石の寝屋古墳群	未指定	明石海峡を一望する高台に築かれた古墳群で、海峡を舞台に活躍した海人(あま)の長が眠ると考えられる。『日本書紀』の允恭紀に記述がある海人の「男狭磯(おさし)」の古墳とする伝承も残る。	淡路市
14	おか たに ごうふん 岡の谷1号墳	市史跡	石室内に納められた家形石棺は竜山石(凝灰岩製)が使用されている。高台に築かれた古墳から臨む播磨灘を隔てた対岸の播磨地域と、海を介した繋がりが窺える。	洲本市
15	はただいせき ぼうじょうせきせいひん 畑田遺跡の棒状石製品	未指定	淡路島最古段階の製塩土器が出土する遺跡。海人(あま)との関係が深い棒状石製品が出土している。	淡路市

16	きふねじんやいせき 貴船神社遺跡	未指定	海人(あま)が生業とした土器製塩を営んだ遺跡。淡路市野島に所在することから『日本書紀』に登場する「野嶋の海人(あま)」の活動拠点に比定される。熱効率の向上を図った石敷炉(いしじきろ)の使用によって大量生産を図った塩は、王権にも供されたものと考えられる。また、出土した新羅系の土器からは、朝鮮半島との関係を知ることができる。	淡路市
17	ひきのいせき 引野遺跡	未指定	海人(あま)が生業とした土器製塩を営んだ遺跡。脚台付きの製塩土器から熱効率の良い丸底式の製塩土器への進化を見ることができる。製塩土器の改良による塩の量産化によって王権を支えた塩づくりの始まりを見ることができる。	淡路市
18	きゅうじょうないいせき 旧城内遺跡	未指定	古墳時代の製塩遺跡。塩づくりの場を埋葬の場として選定した古墳が発見されている。自然石を組み合わせた小型の埋葬施設には、土器製塩に携わった海人(あま)の長が葬られたものと考えられる。	洲本市
19	きどはらいせき 木戸原遺跡と しゅつどいぶつ 出土遺物	未指定	一般集落ではめったに見ることが無い鉄器素材となる鉄挺(てっぺい)や韓式系土器(かんしきけいどき)が多数出土しており、半島との関係を見ることができる。倭の五王の時代に半島との往来を担った海人(あま)の航海術をみることができる遺跡及び遺物。	南あわじ市
20	こやだにこふんしゅつど コヤダニ古墳出土 さんかくぶしんじゅうきょう 三角縁神獣鏡	未指定	古墳時代の首長の権威を象徴する淡路島で唯一の三角縁神獣鏡。海人(あま)が活躍した古墳時代に、王権とつながる淡路島の首長の存在を裏付ける貴重な遺物。	洲本市
21	いざなぎじんぐう 伊弉諾神宮	県有形	『記紀』の冒頭、「国生み神話」に登場する伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱を祀る淡路国一宮。『延喜式』神名帳では「名神大(みょうじんだい)」を、明治18年には官幣大社の社格を、また昭和29年には神宮號を宣下された格式高き神社。平成16年に社殿改修中に発見されたご神像9軀(県指定)はいずれも平安～鎌倉期のものであり、すべて伊弉冉尊を現した女神像であり、県下最古のご神像である。『古事記』『日本書紀』には国生みに始まるすべての神功を遂げられた伊弉諾尊が、最初にお生みになられた淡路島の多賀の地に「幽宮(かくりのみや)」を構えて余生を過ごされた、初めての「宮」と表記される日本最古の宮であり、境内は大神の神託の旧跡と伝えられている。	淡路市
22	やまとおおくにたまじんじゃ 大和天国魂神社	未指定	『日本書紀』に登場する御原(みはら)の海人(あま)を統率したと想定される大和氏ゆかりの神社。	南あわじ市



23	せんざんせんこうじ 先山千光寺	国重文	イザナギ・イザナミの二柱の神が国生みの際に第一に出た山で「先山」と名付けられたとされる。天の岩戸に姿を隠した天照大神を祀る岩戸神社もある国生み神話ゆかりの地。	洲本市
24	おいしみず 御井の清水	未指定	『古事記』の仁徳紀にある「朝夕に淡路島の寒泉（しみず）を酌んで大御水（おおみみい）として献上した」清水の伝承の地。大阪湾を渡って御陵水を運ぶ海人（あま）の姿を想像させるとともに王権との関わりの深さを伝える。	淡路市
25	あかしかいきょう 明石海峡と まつほ うら 松帆の浦	未指定	播磨灘と大阪湾を隔てる明石海峡は、潮流の激しさから瀬戸内の難所と呼ばれ、畿内へ向かう海上交通の要衝として、海人（あま）が活躍する場であった。その位置づけが『万葉集』に詠まれた塩づくりを営む海人（あま）の姿となった。今も変わらぬ潮流と多くの万葉歌人に詠まれた風景は海人（あま）が活躍した当時を偲ばせる。	淡路市
26	きたんかいきょう 紀淡海峡と ゆらなるがしま 由良・成ヶ島	未指定	瀬戸内の海上交通の要衝の一つ、紀淡海峡を掌握するための拠点。天然の良港としての由良は、古来より海上の交流・交易拠点としての役割を果たした。紀淡海峡における海人（あま）の活動拠点となったことが想像される。『記紀』にある天日槍（あめのひばこ）の「出石の刀子」ゆかりの生石（おいし）神社もある。	洲本市
27	なるとかいきょう 鳴門海峡と うずしお	未指定	淡路と四国との間の幅約 1.3 km の海峡に生じる世界最大の渦潮とそれを生み出す激しい潮流の鳴門海峡は、海人（あま）の巧みな航海術を必要とした海であった。イザナギ・イザナミの二柱の神が天の沼矛で下界をかき回し、渦巻く様子は、鳴門海峡の渦潮と重なる。	南あわじ市
28	あわじにんぎょうじょうり 淡路人形浄瑠璃	国無形	島を代表する伝統芸能「淡路人形浄瑠璃」は「国生み神話」ゆかりの「えびす舞」を起源とする。	南あわじ市
29	えしま 絵島	市名勝	「国生み神話」に登場する「おのころ島」伝承地の一つ。海人（あま）が活躍した明石海峡を背景とし、長年にわたる風波によって描き出された造形美が「おのころ島」に見立てられたものと考えられる。	淡路市
30	おのころじま 自凝島神社と くにうみしんわでんしょうち 国生み神話伝承地	未指定	「国生み神話」に登場する「おのころ島」ゆかりの自凝島（おのころじま）神社をはじめ、葦原国（あしはらくく）、天浮橋（あめのうきはし）などの神話伝承地。	南あわじ市
31	ぬしま 沼島	未指定	「国生み神話」に登場する「おのころ島」伝承地の一つ。島の太平洋側に浮かぶ小島で、島に残る古墳や製塩遺跡、立神岩の信仰などに、大海に漕ぐ出す海の民の拠点であったことが想像される。「沼島」の「沼」は「国生み神話」の「沼矛」に	南あわじ市

			由来するといわれる。また上空から見た島の姿が勾玉の形をしていることや「立神岩」をはじめとする巨大な奇岩が島の周囲を取り囲んでいることが伝承を生んだものと考えられる。	

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

## 構成文化財の写真一覧

1 中川原銅鐸



2 日光寺銅鐸



3 銅鐸出土地 中の御堂



4 松帆銅鐸



5 慶野銅鐸





6 古津路銅剣



7 五斗長垣内遺跡



8 塩壺西遺跡



9 舟木遺跡



7 五斗長垣内遺跡出土品



10 ニツ石戎ノ前遺跡出土品



11 下内膳遺跡



12 沖ノ島古墳群



沖ノ島古墳の棒状石製品



13 石の寝屋古墳群



14 岡の谷 1 号墳



15 畑田遺跡の棒状石製品



16 貴船神社遺跡



17 引野遺跡





18 旧城内遺跡



19 木戸原遺跡の韓式系土器



20 コヤダニ古墳出土 三角縁神獣鏡



21 伊弉諾神宮



21 伊弉諾神宮の御神像



22 大和天国魂神社



23 先山千光寺



24 御井の清水





25 明石海峡と松帆の浦



26 紀淡海峡と由良・成ヶ島



27 鳴門海峡とうずしお



28 淡路人形浄瑠璃



29 絵島



30 自凝島(おのころじま)神社



30 国生み神話伝承地（天浮橋）



31 沼島（上立神岩）



30 国生み神話伝承地（葦原国）



※複数ページにわたっても可